

昭和南海地震

第2次世界大戦時、徳島市内は計6回の空襲を受けました。昭和20年6月から7月にかけてのことです。7月4日の未明、徳島大空襲により、徳島市内は1日にして市街地の60%以上が焦土になりました。

この翌年、昭和21年（1946年）12月21日午前4時19分、昭和南海地震は発生しました。その地震規模は、マグニチュード7.3であった平成7年（1995年）の阪神淡路大震災より遙かに大きく、マグニチュード8.0であったと言われています。

専門家によるこれまでの調査や研究の結果、南海地震が地球規模のプレート型の地震であること、約100年ごとに再びやってくる地震であること、などがわかってきました。

表 1-1 南海地震による被害

被害種別	徳島市	名東郡
死者(名)	2	1
負傷者(名)	5	
全壊(戸)	23	6
半壊(戸)	22	8
堤防欠壊(か所)	1	
船舶流失(隻)	3	
田畑冠水(町歩)	60	
木材流失(石)	500	

出典：村上・細井・島田：歴史地震第6号別刷「徳島の津波」、歴史地震研究会、平成2年



図 1-1 徳島新聞記事より抜粋
(昭和21年12月22日付け)

表 1-2 徳島新聞記事より抜粋 (昭和21年12月22日付け)

津浪も襲来 本県の被害甚大

地震だ！二十一日午前四時二十一分十八秒二、折から臨時歳末警戒で徹夜動員していた徳島署員は疲れた身体に衝撃を感じた。「途端にしんしんと鬼気迫る夜空に募る光芒が立ちこめて、地響きとともに一度に騒音、バラックからどっと人々が溢れ出た。歳末警戒は自動的に被害者救出調査、治安保護にきりかえた」と警戒隊は刹那の光景を語っている。時ならぬ大地の動きで県民は師走の夢を破られた。頭から毛布をかむった者、ふとんにくるまった者、リュックの非常袋を背負う者、わめく者、ひとびとは恐怖の声にのどをつまらせつつ瞬間のでき事を語り合う。落ちつく間もなく倒壊家屋火災発生などの情報がとびこみ不安な空気が漂う。徳島市では眉山に城山に集団的な避難をした。布団をかつぎ家財を背負い、子供の手をひいて、夜明をまちやっとなが家に還ったほどだった。本紙速報版には黒山の人だかり不安のなかにも生気をとりもどし正午すぎようやく師走の街の姿をとりもどした。

写真 1-1 徳島新聞
昭和 21 年 12 月 22 日より



倒壊した家屋の傍らで炊出す被災者
(吉野本町 6 丁目にて)

写真 1-2 徳島新聞
昭和 21 年 12 月 22 日より



高潮の襲来で荷船が衝突破損 = 荷物を下ろす
ところ (かちどき橋にて)

写真 1-3 徳島新聞
昭和 21 年 12 月 22 日より



吉野川畔の地割れ = 最大幅一尺五寸

南海地震の歴史と特徴

日本周辺の地震は、陸域に起こる地震と海域に起こる地震があります。海域に起こる地震の代表的な地震として、紀伊半島や四国の南沖を走る南海トラフと呼ばれる海溝域を震源とする巨大地震があります。この南海トラフを震源とする地震は、西側で発生する地震を「南海地震」、東側で発生する地震を「東南海地震」と呼ばれています。南海地震は、歴史等から判明しているだけで、684年白鳳地震から1946年の昭和南海地震まで、マグニチュード8級の巨大地震が、約90年～150年の間隔で、8～9回程度発生したことがわかっています。過去の地震の歴史から、南海地震は、規模が大きい巨大地震（M8級）、繰り返し起こっている地震、津波を伴う地震、などの特徴を持っています。

表 1-3 南海地震における津波の高さ

	小松島	撫養
安政南海地震津波(1854年)	* 3.1m	* 4.2m
昭和南海地震津波(1946年)	* 1.7m	** 0.9m

* 中央防災会議「東南海、南海地震等に関する専門調査会」(第8回資料)、平成15年2月

** 村上ほか：「四国沿岸域における歴史津波の浸水高評価」、月刊海洋号外 No.28、2002年

表 1-4 南海地震・東南海地震の歴史

	年代	南海地震	東南海地震
1	天武(白鳳)	* 684年11月(M8.4)	?
2	仁和	* 887年8月(M8.6)	?
3	康和・永長	** 1099年2月(M8.0~8.3)	* 1096年12月(M8.4)
4	正平	* 1361年8月(M8.4)	?
5	明応	** (1498年7月(M7~7.5))?	* 1498年9月(M8.6)
6	慶長	* 1605年2月(M7.9)	* 1605年2月(M7.9)
7	宝永	* 1707年10月(M8.4)	* 1707年10月(M8.4)
8	嘉永(安政)	* 1854年12月(M8.4)	* 1854年12月(M8.4)
9	昭和	* 1946年12月(M8.0)	* 1944年12月(M7.9)

* 渡辺偉夫：日本被害津波総覧、(財)東京大学出版、pp.70-72、1985

** 毎日新聞高知支局「南海地震の碑を訪ねて、石碑・古文書に残る津波の恐怖」、平成14年11月

平成18年1月18日に地震調査委員会は、発生確率を次のように変更しています。
 今後30年以内の地震発生確率は、50%
 50年以内の地震発生確率は、80~90%

◆次の南海地震

南海地震のように、発生間隔が分かっている地震は世界的にも少なく、21世紀前半に次の南海地震発生の可能性が高くなっています。政府の地震調査委員会は、今後、30年以内の地震発生確率が40%程度、40年以内の地震発生確率が60%程度と予想しています。

次の南海地震の地震規模は、1854年の安政の大地震と同程度のM8.4と予想されています。これは、阪神淡路大震災の45倍、昭和南海地震の4倍、関東大震災の6倍もの大きさです(表1-5、図2)。津波も安政の大地震と同程度とすると、徳島市で3~4mの高さの津波が予想されます(表1-4)。

また、昭和南海地震発生時と比べて、徳島市内の市街化が飛躍的に進み、地震時の被害の増大が予想されます。

表 1-5 地震規模の比較

地震	地震の規模	地震規模の比較	次の南海地震の規模は
阪神淡路大震災(1995)	M7.3	1倍	45倍
関東大震災(1923)	M7.9	7.5倍	6倍
昭和南海地震(1946)	M8.0	11.3倍	4倍
次の南海地震(21世紀前半?)	M8.4?	45倍	1倍

参考：日本災害情報学会・東京大学社会情報研究所・NHK高知放送局・高知県ほか主催：シンポジウム「南海地震にそなえる」記録、2003年2月1日／www.pref.kochi.jp/~hisho/chiji/hatugen*15_2_1.html

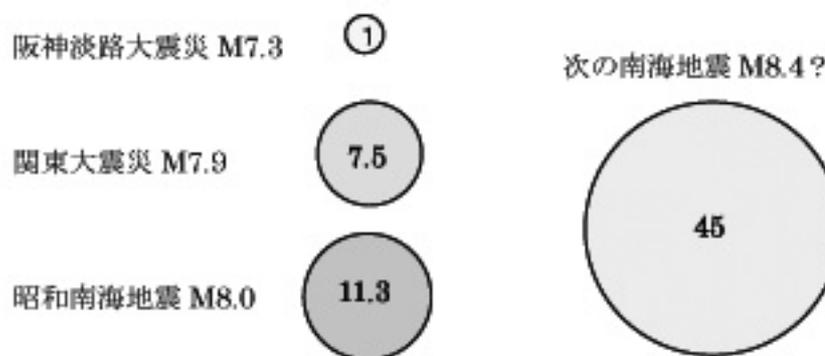


図1-2 地震規模の比較図



写真 1-4 眉山から城山方面の展望風景(昭和 20 年 7 月)、立木写真館提供



写真 1-5 眉山から城山方面の展望風景(平成 15 年 3 月)



写真 1-6 眉山から蔵本方面の展望風景(昭和 24 年頃)、加茂名小史第四集より



写真 1-7 眉山から蔵本方面の展望風景(平成 15 年 3 月)